



國家圖書館編

# 東亞同文書院 中國調查手稿叢刊

34

國家圖書館出版社



國家圖書館編

東亞同文書院  
中國調查手稿叢刊

34

國家圖書館出版社



# 第三四冊目錄

昭和五年（一九三〇）旅行日誌（第二十七期生）

|      |       |       |     |
|------|-------|-------|-----|
| 中馬靖友 | 第六十八卷 | ..... | 一   |
| 中崎強  | 第六十九卷 | ..... | 六七  |
| 芝國重  | 第七十卷  | ..... | 一〇三 |
| 澤登譽  | 第七十一卷 | ..... | 一四九 |
| 桑島泰雄 | 第七十二卷 | ..... | 二八一 |
| 梅田潔  | 第七十三卷 | ..... | 三四七 |
| 久重四郎 | 第七十四卷 | ..... | 三八七 |
| 蜂谷貞雄 | 第七十五卷 | ..... | 四一五 |
| 永安文三 | 第七十六卷 | ..... | 四八一 |
| 陳濟昌  | 第七十七卷 | ..... | 五一九 |
| 小林鈔  | 第七十八卷 | ..... | 五七一 |

昭和五年九月

旅行日誌

平二十六期生

中島靖友



調査旅行日誌

六月一日

旅はあきかたである。本島に今日の日は四年の待

つた。旅は感激である。如何に今日の旅立ちを待たうあぐんだ事で

あきかたう。午前九時奉天丸は大連汽船会社の碼頭

一黄浦碼頭から碇を上りると同時にホーと一斉に北方への

遊歴隊三十数名を乗せて北へとその横の腹を離れ始めた

白青赤とりとりとテーパーの電散山見送りの書院健児の大旅行

敢山今まで之んち私として感激せしめた事は無い

三十数名の旅り隊が乗ったので船の中は忙し人同のすじつあり

如し。船中頗る暑し。

船は早や揚子江から飛び出し一路青島へ。先輩輩は知己へ

手紙を書かんとすれども。心の底に噪と旅への憧憬は私を

一向筆士はかゝうして呉れあい。本島に旅に出たのだ見知らぬ  
土地へ行くのである。如何にすれば我手班員五名かつゝかき  
この旅を終へる事が出来ようであらう。唯自利た私は斯く哲  
つた。

船中サイターニ奉。支那金壹元ニ十仙也。眼球が飛びてた  
氣持かいたと同様之後支那銀対日本金の為る相場の  
変動は如何に私手を苦ませようと思ふと思ふと嫌になよ。

六月二日。十二時半青島上陸。上海フーリスト、ビブロー主任相  
沢氏、介紹に依り中山路松茂里旅館に入る。直ちに青島新  
聞社へ久慈氏訪問。久慈氏の好意に依り調査班の名刺を  
印刷して頂く。三十週紀念に關してお話し申上げ直ちに旅館  
主の案内で魯大会社に藤森氏訪問。夜東棉の本田、大倉  
忠実、田中氏の招待に與かる。膠濟鐵路既に獸禍の爲め旅行

線の一部変更を止むなくせしめられたのは迷惑の極みであつた  
 六月三日 朝起きると直ちに汽船会社に行き天津行き  
 の汽船の有せを尋ね直ちに各班に電話して團伴切符の買入れに  
 奔走し各班の宿舎並に汽船会社との間を三四回往復し切  
 符の買入れを終はり 朝十時先輩の案内で青島見学、自傷車  
 四台を連うねり市内を廻り、忠の海海岸―會泉峯―砲台―朝  
 日砲台―忠魂碑―青島神社―屠殺場 赤煉瓦と緑葉の町  
 青島は住むに良い所であると思つた。独逸人の東方侵略の根  
 拠地として作つたこの町は如何にも徹底的で科学的であることに感心  
 したと同時に之が汚れたない支那人の手で管理されつゝある今日  
 今後之の歸かき場と着いた立派な町かといふに汚れたく騷々い  
 所になつてゐるふたつと思ふと町のほかに立てゝ巡捕の類か  
 非常に悪くらしい。又國民政府の宣傳板が周圍の気分と少しも

4

しつくり合つて居るのを見、時々はひもかけてやり、い気分にな  
る。強固なる國民政府樹立の爲、現在迄の建設的美觀をムサ  
く破壊し去る支那人の気分は、どうも解かり兼ねる。

夕六時七十分、哲友、赤峯氏訪問、回蒞に於ける。

其の後散會、青島の夕景は素好に良い。

六月四日 午後二時十五分、長平丸で天津へ。

三千噸の船ではあるが今日のなまぐで少しも揺れぬ三時半同船  
旅行班連名にて天津先軍宛電報を打つ。

六月六日

船は白河を蛇形にうねり乍ら進む先方河流なき处に進むか如  
し、正に奇觀なり。午後二時苗独逸租界へ天津特別区へ  
に碇を下す。其の間太沽より白河を遡ると約五時、白河  
に堅固なる堤防の築造を痛感す。碼頭に森春雄氏出

迎へ下さる。ビクトリー街の藤次氏宅に我等五人由り介になる。  
夜七時半天津支店の觀迎会に出席す。先輩諸子。有在  
きたる時局談並に旅行注意を拜聴す。先輩諸子の時局談  
余まりに北方景氣なるに少々不快を感ず。

六月七日

調査に關して元奉天に居る現在天津大福公司に居る、  
青井氏訪問氏の造詣深き調査並に調査に關し少くノート  
して辞す。市内見物興がに北方の門戸なあつて小さいなう  
し近代都市として申分なき設備を有して居る。特にビクトリ  
ヤ街は其の代表的なものだ。數十の銀行、会社、櫛比と居る。  
棉子は上海バンドの縮圖なる觀を思はせし。夜森氏の送別  
會で物馳走になる。たか天津には上海のそれの如き活氣が無  
い。死んだ様子を靜かき町に。我等獵奇的心を榮渌

をうしむ可き利敵は強んじ見つかりぬ。灰色で蔽はれた町。過  
ぎて疲らされた町とも思へぬ。多分永年の戦禍と重なり  
為たかとも知れぬ。天津日本租界の疲弊は又甚かしい  
日々に其の勢力を支那人に侵蝕され裏町へ追ひやうつゝある  
のを見る

夜小山田氏訪問 天津市況に關して物語を受け承はる。

六月八日

森氏の見送りを受ける古都北平へと天津を出發。北平北池子大倉  
組へ一先づ旅装を解く。夜一聲館にて久方振りに上村兄と遇ふ。  
物語り盡きず上村兄の下宿へ止宿し到り曙曉を飛ばし夜の更く  
るを知らず。北平は古都たる静寂其の者だ。経済的活動は全く  
見られぬ。全部の人間は皆△後で居る。たかう動く気はひは全く  
見えぬ。寝む所の町だ。そして又北京語は僕等をして故郷に

に帰った原を氣かす。誰か「黄包车までか北京語つかいやか」と  
云ったのも本意だと首肯される。

六月九日

宿所を城外満留屋旅館に変更。午食後直ちに城内見学。

天壇―正陽門―中山公園―皇城―北海―鼓楼―鐘鼓―孔子廟  
―<sup>喇嘛</sup>廟と黄包車を駆る事にて七時同車費七十仙一時内一台  
当り十仙也如何に其の便宜を驚かす。塵汚と熱さで身体  
綿々如く疲労す。

六月十日

六時半出發電車にて西直門に至り八時半茶点終環により三時  
十一時十五分過か東門橋駅着。八達嶺長城見学。途中駅を  
にて張家口方面より来る荷物多し。甘肅省嘉峪関より直隸  
省山海関に至る五千四百四十支墨。延長一万二千余支墨。

今を去り二千二百七十有餘年前、魏の惠王起工してありして、夫れは始皇帝の完成により、外夷の侵入を防止せんとし、築ける長城の一角に起り、遠く胡北の彼方を打ち跳ねれば、さうする其の超人の偉業を思ひ起すに足ふ。凡そ其を強く、胡北の黃崖以て遠望を妨く。

六月十一日

學校改革運動に關して入電あり。原田邦彦に有る確たる所不明、良くて諒解に苦むとして、内合の電報を打す。

十時半、万壽山見よ。西太后榮華の跡、又知れに充分なり。帰館後、餘り一部変更し、關して協議す。熱河に至り、以て白音太参に到らんとする。旅を編隊せしむ都合により中止。又大食理先輩、某氏の意見並に各員の考へにより、朝陽見よの必要を認めず、止む無く朝陽の放棄。明朝八時十五分、祭の火車にて、千山灣に向き、去祭するものなり。

六月十二日

午前八時二十分北平水関免火車站出發連山溝に向ふ買票の時連山溝にては該列車は停車せずとの故終中縣迄買ひし中途列車ホーイ並に食堂車ホーイに連山溝駅に停車するや否やを肉合せしに「不知道」と。列車山海関を過ぐる頃該列車の連山駅停車する旨を知り急ぎ切符の買直しをすやう何や文書係なりし私は朱奔而走以て其の目的を達し食堂車に於いて慰勞の茶を以て班長と同君と独逸ヒールの栓を抜きしは誠に忘れ難き思ふであらう。北寧路線は清潔並に時分厳重の点にては尤程云々すること無きも各駅毎に規立する軍隊手の可怪の眼並に二手車にのさばりかへる軍人連中の傲慢さの顔又頗る悪くらし。

夜九時四十八分連山駅着。相當の所ならんと期待せしも生計

らんや一集村に過ぎずしを。交渉係たる私は駅長に面合  
 し胡芦島行き軽便鉄道の榮着時刻並に客様の有無を尋  
 す可<sup>面合せし</sup>駅長兼小使たるが如きべし其の凡貌は比較的奎々  
 たる者きりよし一者之態。知れぬ異様な服装をなせる我手  
 五名を見不審の色明らか顔面に表はし以て我手に対志し  
 不安と危惧と交又したる様子ありありと見えつけれど「我々は本  
 面目文書院の学生」に漸く納得し。駅内に拘とめ致し度けれ  
 ど丁な空屋なく甚だ遺憾であると言ひ。小一里の所に客旅  
 ある故とここにお出になつたやう如何との事。直ちに馬車を雇  
 ひ小一里の道をテウ／＼歩き。時刻も既に十二外を過ぎ漸くにして  
 到着。直ちに宿屋の交渉を初む。暴利を貪ぼる客様主に我手  
 同志五名の憤慨は遂に深更に敗けず旅館を飛び出す。時既に  
 午後前一時前。扱て何処に一夜の夢を終はんか。班員五名意

六月十三日

13